

国内研修 報告書

私は2016年2月2日～2月10日の間、国内研修として四国に行ってフィールドワークを行いました。地域おこしに直接触れることにより、まずどういうものであるのかという感覚をつかむこと、またそこから得た知識や知恵を生かし、将来日本が直面するであろう過疎問題の解決に役立たせることを目的とした。

本研修では四国四県をまわった。これは観光の名所とされているところと過疎問題に面しているところや直面したうえで何らかの対処をしているところ、したところを見比べることによって自分の中で地域おこし、地域活性についての感覚をつかむためである。その結果わかったことを以下に列挙する。第一にわかったことは、地域おこしとしての取り組みはその地域によってベクトルが違うということである。これは当たり前のことであるが、何をすべきかは何ができていないかで決まる。それが地域ごとに同じわけはなく、故に各地域によってやっていること、やろうとしていることが異なる。場所によっては、市内でもやろうとしていることが異なる場所もある。たとえば、愛媛県の伊予市では、伊予町では町の人々を活性化させようと動いているのに対し、伊予市の双海町では外からの移住者を増やそうという動きを強めている。第二にわかったこととして、地域おこしは企業と結びつくことが多いということだ。先に挙げた伊予市では、地域おこし協力隊の方々、株式会社まちづくり郡中が結びついてサロンのようなものを運営したりなどしていた。有名な徳島県の葉っぱビジネスは株式会社いろどりが先導して行っているし、徳島県上勝町では多数の企業が集まりサテライトビジネスを展開している。香川県の小豆島では、日産が観光や地域への参入における利用形態の検証を兼ねて二人乗り小型電気自動車を島に置いて貸し出しをしていた。実際に使ってみたところ、充電場所や方法が分からなかったり行ける場所が限られていたりなど問題点は多々見受けられたが、バスの本数が少なく、坂道が多い島での移動にはもってこいのものだったといえる。小豆島は映画やドラマのロケ地となっていたり、オリーブなどの売りもあることから、観光地としては非常に優秀であると思われるため、日産に限らず、企業が何らかの検証をする際に有力なデータがとれる場所であると考えられる。第三にわかったこととして、住民の満足度と観光は必ずしも関係しないということだ。徳島県の海部町は、日本において自殺発生件数最下位、つまり日本で最も自殺者が少ない町であるが、これとって観光するものはなかった。しかし実際に町に赴くとわかるのだが、福祉施設、こと高齢者福祉施設が非常に多い。また住民の気質がゆったりとしていて、他人を気にしすぎないといったところが生きやすさにつながっているようだ。第四にあげられることとして、交通の便が悪くても人は集まるということだ。語弊の無いように伝えたいが、交通の便は良いに越したことはない。交通の便が悪いところは事故も起きやすいからだ。今回の研修の合間に立ち寄った祖谷溪谷というところはものすごく交通の便が悪く、車で山道を走り続けてやっとたどり着くようなところにあ

った。しかし人は多く集まっていて、老若男女関係なく人がいた。祖谷溪谷は温泉で有名であることがわかった。また、愛媛県松野町の滑床溪谷も、かなりの山奥であるにもかかわらず、若者が歩いていたりしていた。これは人々が何を求めているかを考える良い材料だといえる。今回の場合は、人は秘境的なニュアンスを求めているのだと考えられる。普段いけない場所に行くプレミア感、それを味わった人が Twitter や Facebook などの SNS に画像をアップし、魅力が伝染していく情報のスパイラル。こういったものは山間部や離島のみならずいろいろな場所における地域おこしにおいて有効な考え方であると私は考える。第五にあげられるのは、第三にあげたものと重複する意味をもつが、地域おこしは必ずしも観光に依存しないということだ。しかしこれは、地域おこしについての知識がない者にとっては見落としがちなのところと思われる。私も頭ではわかっていたが実際に行ってみて実感したところが大きかった。ではなにが重要なのかというところだが、それは人々が協力して暮らすことだと私は考える。というのも、今回お話を伺った方が口をそろえていていたのが、「問題を解決しようとしたのではなくて、とにかく人と関わることを考えた」といった旨のことだった。町の人たちがやる気にならなければ意味がなく、逆に町の人たちがやる気になって活動しているのなら、協力隊は必要なくなる。町の人たちに協力するのではなく、町の人たちの協力してもらうのが地域おこし協力隊なのだということだった。第六にあげられるものとして、地域では若者の姿を見ることが少ないということだ。例えば愛媛の県庁所在地の松山では、商店街を歩く若者の姿は多く見受けられた。しかしちょっと都市部を離れ、郊外に向かうにつれ、その姿は減っていき、先にあげた松野町ではほとんど見られなかった。これは俗にいう「仕事がない」という現象の結果だと考えられるが、実際に仕事がないわけではない。それどころか、地域おこし協力隊の方は人手が足りないと言っていた。私は首都圏に暮らしているが、首都圏だろうと働けない人間はたくさんいる。おそらく都市部も地域も働き口の数は大差ないだろう。ではなぜこのようなことが起こるのか。それは親世代の影響だと私は考える。親世代が子供に安定した暮らしをさせようと、勉強して東京の大学に行って就職すれば安定した暮らしができると思い込み、都会を目指そうとする。確かに都会は稼ぎが多いだろう。しかしその分物価が高い。実際に四国に行って感じたことだが、野菜が非常に安い。しかもおいしい(これは主観ではあるが)。家賃もずっと安い。稼ぎが劣る分、コストパフォーマンスの面で圧倒的に暮らしやすいと私は考える。問題はこれを若者が知らないということだ。その改善のためには SNS では物足りないと考えられる。SNS はこういうところがあるよと情報を拡散しやすい分、情報の流れが速いため、自分とは無関係だという意識を作ってしまう、記憶に残りにくい。若者たちに確実に知らせるためには、高校などに告知をし、しっかりとした進路として町に貢献するある種の制度のようなものを整える必要があると私は考える。

今回の研修を通し、私は2つの大きな収穫を得ることができた。一つは地域おこしについての自分なりの見識を持つことができたことである。今後、地域おこしについてより深

く学び、学んだことを活かすための基盤を作り上げることができたことは将来の進路選択及び問題解決の中で大きな役割を担ってくれると考える。二つ目は、人と人とのつながりの大切さを知ることができたことである。私は今回の研修の中で忙しいにもかかわらず突然のアポイントに対応していただいたり、人を紹介していただいたり、その方々とお話しさせていただいたりした。そのお話の中でもまた、人の関わり、人のつながりの大切さを実体験をもとに教えていただいた。たくさんの人に助けていただいた経験を忘れずに、社会に出たら私も学生に限らず、人に手を差し伸べられるような存在になりたい。本報告書では言葉足りず報告できなかったことを含め、これらの経験を活かし、これからも地域おこしや人のつながりについての学びを深めていきたい。